

自由とは何か —バーリンの自由論—

濱 真一郎

(大学法学部准教授)



法哲学における自由論の試み

私の専門は法哲学です。法哲学といわれても、どのような学問かわかりにくいかもしれません。それは、法の世界に存在するさまざまな基本的問題や根本的問題について掘り下げて思索し、より良い解答をみつけようとする学問領域です。現代社会における法哲学的問題の中核にあるのは、「法とは何か」「法が実現すべき価値は何か」「法的思考や司法的裁断の特徴は何であるか」の三つです。私はここ数年、「法が実現すべき価値は何か」という問題に即して研究を進めていますが、法が実現すべき価値の候補としては、正義、自由、平等、人権などがあげられます。私自身は、とくに自由を念頭に置いて、法哲学の領域における自由論の可能性を探求しています。

バーリンの自由論

2001年にアメリカで起こった同時多発テロ事件の余波が冷めやらぬ時期に、英国の思想史家アイザイア・バーリンの遺稿がニューヨークの書評誌に掲載されました。それは彼が1981年に記したメモですが、まるでテロ事件を目撃して書かれたかのような錯覚を起こさせ

る内容です。とくに印象的なのは、一感覚できない人々や、完全には理解できない人々と妥協することが、品位ある社会には不可欠である」という一節です。

テロ事件の背後に存する価値の多元性は、程度の差こそあれ、人間社会に存在してききました。価値の多元性および、それが伴う価値の衝突・葛藤が存在するという事態は、人間が避けることのできない経験的な事実です。さらに、冷戦後の価値の多元化が、価値の衝突・葛藤を激化させていることもまた、人間が直面している事実です。バーリンは、こうした価値の多元性を認識した上で、独自の自由論を提示しています。

バーリンは、教授就任講演「二つの自由概念」（1958年）において、積極的自由と消極的自由という二つの自由概念を区別しました。積極的自由とは、特定の目的を設定した上で、その目的に従って自己支配ないし自己実現を行う自由です。バーリンによると、積極的自由の概念には危険な側面があります。というのも、その概念は国家に対して、特定の目的を真であると称し、その目的に従って諸個人を強制的に自己実現させる正統性を、付与する恐れがあるからです。バーリン自身は、消極的自由の概念を

擁護します。これは、自分のなす選択について他人から干渉されないという意味での自由です。消極的自由は、どれぐら多い多くのドアが開かれているかを問題とします。その概念は、ドアが通じている部屋の道徳的性格を評価することはありませんが、消極的自由にとつて重要なのは、ドアが開かれていることそのものなのです。結局、バーリンの自由論においては、消極的自由を基礎に据えたりベラリズムが擁護されることとなります。

一元論と価値多元論

バーリンは、消極的自由の価値を、他の諸価値よりも前面に打ち出します。その意味において、彼は一つの価値（消極的自由）だけが普遍的であるという、一元論を擁護しているように感じられます。しかし彼は、実際には価値多元論という立場を取っています。一元論と価値多元論の違いについては、バーリンは以下のように説明しています。

西洋の伝統的な支配的思想は、いくつかのパリエーションがありますが、基本的には一貫しています。すなわち、それは一元論です。一元論によれば、一つの問題には一つの正しい答えが伴います。もしも正しく考えるならば、人間はその

答えに到達することができません。もしも到達できないなら、それは問いを考える人間の側に問題があることとなります。しかるべき人間がしかるべき方法で考えるならば、一つの正しい答えが必然的に導出されるのであり、人間が追求する価値・理想、自的に関しても、一つの正しい答えが存在するということとなります。

バーリンによると、以上の想定は誤りです。人間の日常的な経験が示すところに従えば、人間が追求する価値や理想は多元的です。さらに、それらの価値は互いに衝突するのであり、衝突を完全に回避する方法も存在しません。それらの価値は、共通の尺度で互いに比較することができないのです。とすると、人間の世界において、価値の衝突・葛藤——悲劇——を取り除くことはできないこととなります。これが、バーリンが提示した、人間の世界の描写なのです。

リベラルな民主制を選ぶための根拠

以上で確認したように、バーリンは消極的自由を基礎に据えたりベラリズムを擁護すると同時に、価値多元論の立場を取っています。しかし、ここには大きな問題が潜んでいます。例えばイギリスの政治哲学者ジョン・グレイは、バーリン

を以下のように批判しています——もしも価値多元論が正しいとすれば、バーリンが擁護する消極的自由という価値は、多元的な諸価値の一つにすぎないのであるから、それは他の諸価値に対する優先性を有さない。あるいは、もしも価値多元論が正しいとすれば、消極的自由を基礎に据えたりベラリズムは、普遍的というわけではない——以上のグレイの主張からすると、もしも価値多元論が正しいとすれば、リベラルな民主制は、他の政治制度（例えば、個人の自由を否定するような政治制度）よりも優れているわけではないこととなります。すなわち、リベラルな民主制を選ぶための根拠は存在しないことになってしまいます。

グレイからの批判に対して、生前のバーリンは何の反応も示しませんでした。しかし、死後に出版された遺稿を読むと、バーリンはグレイの批判を退け、「リベラルな民主制を選ぶための理性的な根拠」を提示しています。この理性的な根拠については、先日まとめた私の研究の中で、検討を加えています。ともあれ、今後もバーリンの自由論を導きの糸として、自由とは何かという問題を考え続けていきたいと思っています。

(はま しんいちろう)

正しい日本語とは？

伊藤 紀子

(大学文化情報学部専任講師)



日本語のゆれに関する研究調査

『昨今、「方言」がもてはやされたり「若者ことば」や「日本語の乱れ」といった話題が新聞・テレビ等でたびたび取り上げられておりますが、そこで例に挙げられる言葉づかいを見てもりますと、一口に「日本語」と申ししましても一様ではないことがわかります。

私どもは、この度、社会言語学の講義の一環として、そのようなことばの使用われ方に関するデータの収集および分析に取り組むことにいたしました。この調査の重要な目標の一つは、言語使用と話者の性別、年齢、出身地といった属性との相関を明らかにすることにあります。

また、学生自らデータ収集・分析を行うことは、データサイエンスを研究の柱として掲げております文化情報学部の学生にとりまして、大変貴重な経験となります。ご賛同ご協力いただけます場合は、次ページ以降の調査票にご記入いただきますよう、お願い申し上げます。

これは、「言語解析基礎—社会言語学入門」という講義で使用しているアンケート調査票の冒頭の部分です。言語学を

専門とする私が文化情報学部ならではの言語学の授業とはどのようなものかを考えたとき、講義形式で言語学の知識の受け渡しを行うだけではなく、データに基づく実証的な言語研究とはどのようなかを体験できる場を提供したい、と強く思いました。そこで、調査内容の選定のみが行い、データ収集・電子化・統計処理などの作業は受講生ひとりひとりが行う形としました。おかげさまで、2006年度には約450人分、2007年度には約900人分のデータを集めることができました。これらのデータのほとんどは受講生が家族や友人から集めてきたものです。もしかすると、この文章をお読みくださっている方にもご協力いただいているかもしれません。この場を借りて、お礼申し上げます。

日本語のゆれの例「食べ(ら)れる」

調査内容は、例えば「食べる」ことができる」という意味を表すのに「食べられる」と「食べれる」のどちらが自然かを答えてもらうというものです。従来「食べられる」の形が正しいとされてきましたが、最近では「ら」が抜け落ちた「食べれる」の形が多く用いられるようにな

ってきました。これは「ら抜きことば」と呼ばれている言語表現で、非常に多くの研究調査が行われています。動詞ならばなんでも「ら抜き」になるわけではなく、なりやすい動詞、なりにくい動詞があると言われています。また、話し手の性別、年齢、出身地によって、ら抜き形を自然と感じるかどうかに差があるという調査報告も出ています。受講生には、このような先行研究をヒントに、自分たちが集めたデータでも同じことが言えるのか、言えないとすればなぜか、ということを考えて、期末レポートとして提出してもらっています。

データ解析のプロを目指して

レポートの締め切り前になると、不安そうな面持ちで「先行研究や自分が予想していた内容と違う結果が出たんですけど、これでもいいですか？」と聞きに来る学生がいます。授業で先生が話したことで、本に書かれていることはいつも正しくて、それ以外はすべて間違っている、というのがそれまでの勉強だったかもしれません。しかし、それを鵜呑みにしてデータの研究は始まりません。もちろん、データの整理の仕方や統計処理などが間

違っているせいで正しい結果が得られなかった場合は減点しますが、きちんと確認した上で、それでも同じ結果になるならば、自信を持って提出するようにと勧めます。逆に、先行研究と同じ結果が得られても、途中の作業が間違っていれば、それも減点です。

仮にこれが仕事だった場合、今までと異なるデータ分析結果を出したことで、今まで誰も気がつかなかった機器の不具合を見つけるきっかけになるかもしれません(ことばの話から随分飛躍しますが)。新しいこと、他の人と異なることを主張するのは勇気がいることです。仕事の場合、それ相応の責任も伴います。しかし、学生にはデータと真摯に向き合い、自分の解析結果に自信を持てるようなプロになつてもらえればいつも願っています。

正しい日本語はどこに？

ことばの話に戻りますが、正しい日本語であろうとなかろうと、「ら抜きことば」が使われているのは事実です。それを乱れとして否定的にとらえている人もいれば、ことばに変化はつきものだと認めている人もいます。このような状況

の中で、みなさんはどちらを使うべきだとお考えでしょうか？商品のキャッチコピーを書く時に「ら抜き」をつかってもよいのか、学校で「ら抜き」を教えるべきか、自然と感じる人が何パーセント以上になったら「ら抜き」は正しい日本語として認められるのか、そもそも誰が「正しい日本語」を決めるのか、などなど、いろいろな問題が考えられます。

ちなみに、文化庁文化審議会国語分科会では、現在、正しい敬語の使い方を普及すべく、敬語のあり方について議論しています。(詳しい内容をお知りになりたい方は、文化庁のホームページをご覧ください)。敬語が正しく使えない人が増えているとの指摘は、今回ご紹介した調査の中でも、日頃気になっている言葉づかいとして多くの方が挙げておられました。どうあるべきかを決める前に、実際にどのような使われているのかを調べることは非常に意義のあることです。これからも学生とともにさまざまなデータを収集しながら、言語学の教員として、研究者として、何よりも日本語話者として、日本語のゆれを追いかけたいと思っています。(一いつ) のりこ

京都をフィールドとした研究と教育の融合をめざして

天野 太郎

(女子大学現代社会学部准教授)



2004年4月、同志社女子大学現代社会学部に着任してはや4年。私と同時に入社した学生さんたちも、この春ようやく社会に羽ばたく時を迎えることとなりました。それまでは鴨川のほとり、京都大学大学院人間・環境学研究所の助手を長く務めてきました。人文地理学の歴史と文化が薫る場所がもつ魅力もさることながら、京都・大阪・奈良・三都の間点にあたり、洛外の豊かな緑あふれる京田辺の地から、京都のあり方を考究する意義を実感しています。

私の研究テーマは、女子大学HPにて公開している教員紹介ページでは、「京都地域研究、近代の観光、中近世都市、近代植民地都市に関する研究など」としており、取り留めなく見えるかもしれませんが、しかし、歴史的な問題から現代に至るさまざまな課題に対して、わたしの専門領域である人文地理学、歴史地理学的なものの見方を通して、人と地域のかかわり方の一端を明らかにしていきたい、という想いから研究活動を行っています。そうした中で、最近関心を持っている研究や教育の題材としている一つのテーマ、街道についてご紹介したいと思えます。

京都は、古代に平安京が造営されて以降、千年を越える日本の首都として機能してきました。そうした首都と、日本各地を繋ぐために建設されたのが七つの街道―官道です。古代には日本の国家レベルでの整備道、官道として都を中心に全国へ展開するかたちで作られてきました。奈良の平城京に都が置かれていた時代には奈良、そして平安京に遷都された後は京都を起点として全国へ展開する七つの街道が整備されたのです。これらの街道は、道幅10m前後と広く、また特に平野部ではまっすぐ直線で建設されていたことが、地理学や考古学の発掘成果から明らかになってきています。今日の高速道路建設現場からその古代街道の遺構が検出されることもあり、古代街道のルート自体が今日の土木技術の観点からみても合理的なものであったことが証明されてきています。

実は京田辺キャンパスの傍にも、かつての官道跡が残っています。JR同志社前駅の前にある府道から一本大学よりの細い道。通学用の高架橋の下を通るその道は、古代の平城京と山陽・山陰地方を結ぶ古山陽・山陰道の跡です。この旧道に並行するかたちで近代に鉄道が作られ、今日の京田辺市の都市構造の根幹と

なっていることも含め、その存在はあまり知られていません。

こうした街道や道の機能を考えていく上で、京都は(広い意味で京田辺も含めて)重要な場所です。それは街道だけでなく、大小路の両側には、コミュニティとしての町が形成されてきたという歴史的経緯があるからです。両側町とも呼ばれるその町の存在によって、道は単に町丁の境界としてではなく、文字通り町の暮らしの中心的存在となり、生活と文化を支えてきたという歴史があります。道は、私たちが生活空間とするさまざまな



京の道資料館での教育プログラム

域を支える根幹となる存在ともいえるので、そうした街道や道に関する研究成果の一端として、私は2001年に

国土交通省によってJR京都駅前に設置された道に関する博物館「京の道資料館」の設立と運営に関わってきました。地図資料を中心とした道のあり方や、デジタルコンテンツを用いた展示とともに、中世末期の京都を描いた国宝の「上杉洛中洛外図屏風」の原寸複写を展示しています。これらの展示物は、最新の研究成果の紹介であるとともに、教育の現場としても活用しています。その立地のよさから、この資料館で講義を行いつつ、現地へのフィールドワークに赴くことも珍しくありません。さらに女子大学での教育に活用するばかりでなく、最近では京都市の小中学校における郷土学習の一環としても活用されており、そのプログラムの作成にも、教員志望の学生とともに実践的に携わっています。

また、国土交通省とNHKが作成する、京都の道をテーマにした「京の道」というビデオの共同監修を行っています。今年2008年には6巻まで発行され、女子大の図書館や京都周辺の図書館・資料館・学校に教材として配布されています。またこのビデオを基にしてNHK総合やBS―hiなどでも街道の歴史としてだけでなく、京都観光にかかわる番組として放映されています。東海道を

め、西国街道や山中越、さらには京の町衆の暮らしとも密接な愛宕街道などを対象として、さまざまな街道の四季のうつろいや、歴史・文化・地理にかかわる映像コンテンツとなっています。そのため、私の担当する地理や歴史の講義と教材として、メディアの作られ方、そして京都観光への寄与など、学生たちの視聴意見も反映させながら、企画の段階から教育に取り込み、生きた教材として活用しています。

「地理学」という学問分野の持つ地域への関心を大切にしながら、既存の枠を超えるような幅広い地平を目指して、これからも教育と研究を融合させた新たなテーマに取り組んでいきたいと考えています。(あまの たろう)



NHKの番組ビデオ

中学校技術科の授業実践 ～売り込む棚作り～

沼田 和也

(中学校教諭)



はじめに

技術科の授業では何かしら作品をつくります。作品の見た目の美しさや加工の正確さは大切な技能の一つではありますが、作品を作ることの意味をもう少し広げて、社会の中のものづくりを横目で見ながら授業を計画しました。限られた材料の中で、求められる棚を設計・製作し、売り込むという授業です。中学2年生が対象でした。本稿は、生徒たちの生き生きとした様子から、授業内容（目標）の一つの提示の仕方を探察しようとするものです。

市場調査とデザイン

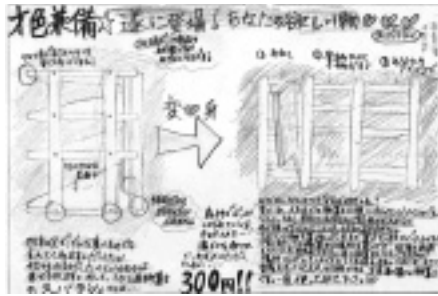
作った作品を家庭で使ってもらうための作品と位置付けました。生徒たちは各家庭で「どのようなものだったら使ってもらえるか」、「大きさは?」、「機能は?」といった具合に「市場調査」をします。次の授業で、各自の調査結果をもとに作品の出来上りを構想し、部品設計に移ります。必修課題は「部品図」です。部品図を仕上げるためには、「お客さん」（保護者）の要望と「自分でできそうなこと」から完成作品をイメージしないとできませんし、限られた材料の中で部材の寸法を決めないといけません。「これを半分にして、こうすんねん」

にいるみなさん！今日は珍しいものをもってきたよ…」などバナナの叩き売りをおわせるユニークな生徒も現れました。

保護者の方から

家庭に持ち帰り売り込んだ後、保護者には作品の感想を書いてもらいます。生徒たちは、保護者の感想をもとに一連の取り組みの考察レポートを仕上げます。保護者の感想を紹介します。

「難しいとわかっていて、あえて三角形の棚に挑戦した事、そして完成品を持って帰れたこと、嬉しく感じました。工程を聞くと、やはり三角形の角を丸める作業や、柱を組み合わせる為の穴をあけ



生徒の広告作品

る作業に気を使っただけです。事実、何度か修正した跡もうかがえ、苦闘を物語っていました。」

「私って何なん?」

一年生のとき「技術が苦手」と言っていた生徒が、なぜか次のような手紙を書いてきました。

「自分が実際に設計から製作まで手がけたことで今まで気にもしなかったことが見えてきました。例えば学校の机も誰かが、私たちが勉強しやすいようにと考えて作ってくれたのかなあとか。…（後半略）…」

提出物とは別に手紙のように折って渡してくれたものでした。成績に関係あるレポートはそれなりに書いてきましたが、前のようなけつこうまじめな内容を私信で渡してきたところ、彼女自身に何か感じるものがあつたのでしよう。

彼女は「技術が苦手」な理由を「先生に言われたとおりにしなくてはいけいないのがいや。やろうと思ってもできないし、言われたとおりにやるだけって、私って何なん?って感じなわけ」と答えてくれました。技術科だけでなく、他の教科でも同じようなことを感じていたことでしょう。

今回の授業も、彼女は私（先生）の言

「えっ、半分にするの!?」、「このこの部分（曲面）は、このままにしといてなあ、脚は…」など盛り上がります。

聞き耳をたてる加工・組立て作業

実験や講義、作業を通して、生徒たちなりに「良いもの」のイメージをつかんでいるようでした。それをかなえるために、道具をうまく使うことや、要領やコツを獲得しようとしているように見えました。うまくやっていると思えた友人の作業の様子をじっと見ていたり、一人ひとりに向けた個別のアドバイスも聞き耳を立てるような場面もありました。

プレゼンテーションと広告づくり

製作実習のあとは感想文を書かせることが多いのですが、このときは「広告」に変えました。出来上がった作品の良さや、自分がかんばったことを「製品の売り」として広告にします。キャッチコピーや絵で表現させました。

「1・25億人乗っても大丈夫!」、「京の職人が心を込めて」、「手触り天下第一!!見て、触って、使って3度お得な本立てです」など生徒たちのユーモアあふれるもので、こちらもずいぶん楽しめました。

家庭で売り込む練習として行ったプレゼンテーションでは、「さあさあ、ここ

う手順にしたがつて実習してきました。その彼女が、わざわざ「今まで気にもしなかったことが見えてきました」という手紙をくれたことがとても印象に残っています。

1年生の時なら「もうこれくらいでええやろ、もうええわ」と言い、作品を「適度」に終わらせてしまふ代表者であつたと思います。ところが今回は、教師から「別にしなくても良い」と言われていたワックスがけをするために、大好きな部活動を休んでワックスを塗りに来る。1年生の時の彼女なら、もちろんワックスをかけなかつたでしょう。

「何の意味があるの?」

中学生が内面に抱えている「なぜ勉強せなあかんの?」「何の意味があるの?」という疑問は、結局は私たちが計画する授業の目標や内容の価値づけを問うているのだと思います。安易に学校の枠（進級とかテスト、成績の評定など）で動機付けさせたくないと思えますし、出来る限りではあります。学校よりも一回り広い社会的な視点を大事にしながら、また、保護者の方々の学校参加の権利を実現できる場面を授業でもつくっていきたいなと思っています。

（ぬまた かずや）

自主学習の力をどう育てるか ～ハテナ(?)の感覚を磨く～

城 恵市
(小学校教諭)



一・学びの快感 自学エンジン
自主的な学び。これは教育の現場では古くから理想とされた学習形態の一つである。受け取るだけの学びから、自らが主体となって、学びたいことを学ぶ。この命題に対するアプローチは様々である。その中で、わたし自身が実践の核にしているのが「学びの快感」からくる「自学エンジン」の形成である。これは、未知から既知への転換の心地よさを体験し、実践を通して学びが遊びを凌駕する仕組みを作ろうとするものである。

二・良質な例題と学びの習慣作り
これまで様々な先行実践から気付いた具体的な方法は、

- ▽良質な例題で学び方を知る
- ▽毎日、思考の訓練をする
- ▽ふしぎだなあとと思う感覚を育てる
- ▽学びを発表する機会を設ける

特に学びの方法や学ぶことの心地よさを感じるができる、「良質な例題をたくさん解く」実践は、効果的である。いくつか紹介しよう。

- ・パスはどっちに走っているの？
- ・この写真の季節はいつ？

・バイナツプルに種はあるの？
等である。

正解がすぐには分からない未知を楽しみながら、知的好奇心を喚起していくのである。

また学びの習慣作りにおいては、「これは一体どうなっているのだろう。」というハテナ(?)の感覚を研ぎ澄まし、毎日記録するように仕組む必要がある。

三・ハテナ(?)のアンテナ作り
良質な例題をたくさん開発し実践する一方で、ハテナ(以下?で表記)のアンテナ作りを計画的に実践していくと、子どもたちの学びは確実に向上してくる。これまでの取り組みから効果的であると感じたことをまとめてみる。

▽毎日思考する訓練をする↓?日記
まず、学びのための準備運動的な取り組みとして、毎日、「不思議に思ったこと・びっくりしたこと・初めて知ったこと」を専用のノートに綴る。

書く際には、向上を見据えた系統性を考えておくことが大切で、易から徐々に掘り下げた実践に移行していくことが望ましい。

はじめは、?を発見することのみに目的をおき、

〇〇はなぜだろう?
〇〇は不思議だなあ。
といった、?感覚を磨くことを重視し、記述は2〜3行でもよしとする。これなら子どもの負担感はない。

次に、?に対してなぜそうなったかを予想する活動に入る。今まで自分が学んだことを中心に、既知から未知を予想するのである。勿論予想なので、正解を出さなくてもよい。自由に発想し、考えることを楽しむのである。そして、教師は常に共感的なコメントを返し、質の良い?や予想は、どんなクラスで紹介しながら、アンテナの感度の良さや、予想の視点の良さを讃える。ここで紹介された子は、徐々に学びの快感を覚え始め、次なる取り組みのモチベーションも自然と高まる。

そしていよいよ?に思ったことを追究する活動に入る。ただし、強要せず、取り組みのトップランナーに対して次の学習のビジョンを示す程度から始める。しかし、この先駆者達の活動は、周囲の子どもたちに対して誠に良いモデルとなっていく。

追究のしかたについては、こちらから提示するのではなく、子どもたちが行った方法を追認する形で賞賛し、モデル化

していく。一般的には、本や百科事典、身近な人へのインタビュー、専門機関へのインタビュー、実験・観察、インターネットの利用等々がある。

低学年の場合は、身近にある自然や生活の中から、お尋ね(質問)をしたり、観察をしたり、本で調べたりすることが適当である。ここでも共感的なコメントを書いたり、次の追究に繋がるコメントを書いたりして方向性を間接的に示す。すぐれた追究には、付箋をはったり、みんなの前で紹介したりする。また、毎日の?日記に通し番号を付けたり、一冊のノートが終わるたびに最終ページに特大のメッセージを書き、何冊目が終了したのか、何月何日に終了したのかを記し、サインと特別の印をおしたりする。こうしたちょっとした工夫にも子どもたちは喜び、どんな?のアンテナを広げ、?感覚豊かな文を書くようになる。

四・発表する場・質問する場の設定

子どもたちが?を発見し、それを追究する中で、知ることの楽しさや自分しか知らない、あるいは、みんなからすごいと思われる(知の快感)体験をすることは、学びへの大きなモチベーションとなり、自学の源(エンジン)にもなる。

そのためには、定期的みんなの学びを共有する場が必要になる。こうした場を持つことよって、みんなが等しく発表し、お尋ね(質問)や感想を言い合うことができるようになり、友だちの学びがクラスの中で共有化できる。さらに話し合いの中で発表者がほしがっていた情報や、発表者が思いつかなかった意見が出され、個人もクラスも学びの練り上げができるようになる。

これ以外にも、

- *発表に向けて発表者がこれまでの追究を整理する過程で、自分の追究を冷静に振り返ることができる。
- *お互いが追究分野のスペシャリストになっているので友だちの発表を肯定的に捉えることができ、素直に賞賛できる。
- *発表の中で分からないことがあるとお尋ねができるので、質問によって発表内容の不備が修正され、それは発表者にとって有益になる。
- 等、意義は多い。

五・今後について

自主的な学びへの模索は続く、今後どんな取り組みがどのような効果につながるか実践を蓄積し、報告していきたい。(じょう けいいち)